

『不如帰』
ほととぎす

徳富蘆花
とくとみろか

「好い風だね！」

海は実に風げるなり。近午の空は天心に到るまで蒼々と晴れて雲なく、一碧の海は所々練れるように白く光りて、見渡す限り眼に立つ襞だにもなし。海も山も春日を浴びて悠々として眠れるなり。

「良人！」
あなた

「何？」

「癒りましょうか」
なお

「エ？」

「わたくしの病氣」

「何をいうのかい。癒らずにどうする。癒るよ、きっと癒るよ」

浪子は良人の肩に寄りつ、「でも万一したら癒らずにしまいはせんかと、そう時々思いますの。実母もこの病氣で亡くなりましたし——」

「浪さん、なぜ今日に限ってそんな事をいうのかい。必定癒る。癒ると医師もいうじゃアないか。ねエ浪さん、そうじゃないか。そらアおつかさんはその病氣で——か知らんが、浪さんはまだ二十にもならんじゃないか。それに初期だから、どんな事があつたって癒るよ。ご覧な、それ内の親類の大河原、ね、あれは右肺がなくなつて、医者が匙を抛げてから、まだ十五年も生きてるじゃないか。是非癒るという精神がありさえすりアきつと癒る。癒らんというのは浪さんが僕を愛せんからだ。愛するならきつと癒るはずだ。癒らずにこれをどうするかい」

武男は浪子の左手を執りて、わが唇に当てつ。手には結婚の前、武男が贈りし金剛石入の指環燦然として輝けり。

二人は暫し黙して語らず。江の島の方より出で来りし白帆一つ、海面を滑り行く。

浪子は涙に曇る眼に微笑を帯びて「癒りますわ、きつと癒りますわ、——あああ、人間

はなぜ死ぬのでしょうか！ 生きたいわ！ 千年も万年も生きたいわ！ 死ぬなら二人で！ ねエ、二人で！」

「浪さんが亡なくなれば、僕も生きちゃおらん！」

「本当？ 嬉しい！ ねエ、二人で！——でもおかあさまがいらっしゃるし、お職分つとめがあるし、そう思っておいでなすつても自由にならないでしょう。その時はわたくしだけ先に行って待またなけりやならないのですねエ——わたくしが死んだら時々は思い出して下さるの？ エ？ エ？ 良人？」

武男は涙を揮ふりはらいつつ、浪子の黒髪かみをかい撫なで「ああもうこんな話は止ようじやないか。早く養生して、よくなつて、ねエ浪さん、二人で長生ながいきして、金婚式をしようじゃないか」

浪子は良人おっとの手をひしと両手に握りしめ、身を投げかけて、熱き涙をはらはらと武男が膝に落しつつ「死んでも、わたしは良人あなたの妻ですわ！ 誰たれがどうしたツて、病氣よそしたツて、死んだツて、未来の未来の後さきまでわたしは良人の妻ですわ！」